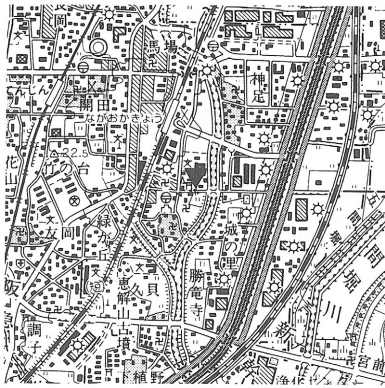


京都・中世勝龍寺城跡

しょうりゅうじじょう

- 1 所在地 京都府長岡京市東神足二丁目
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)五月～八月
- 3 発掘機関 長岡京市教育委員会・財長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 室町時代(一五七一年～一五八六年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

勝龍寺城は、小畑川と大川の合流点付近に位置する中世後期の平

城である。築城については、暦応二年(一三三九)に細川頼春・師氏によるとする説と、長祿元年(一四五七)に畠山義就が乙訓郡役所として造営したとする説がある。戦国時代末期には松永久秀と三好三人衆の属城となっていたが、織田信

長がこれを攻略し、永祿三年(一五六〇)には細川藤孝に下される。細川藤孝は元龜二年(一五七一)に城を再整備するが、天正九年(一五八一)に藤孝は宮津城に移り、翌年の山崎の戦いにおいて、明智光秀軍の拠点となり、落城した。

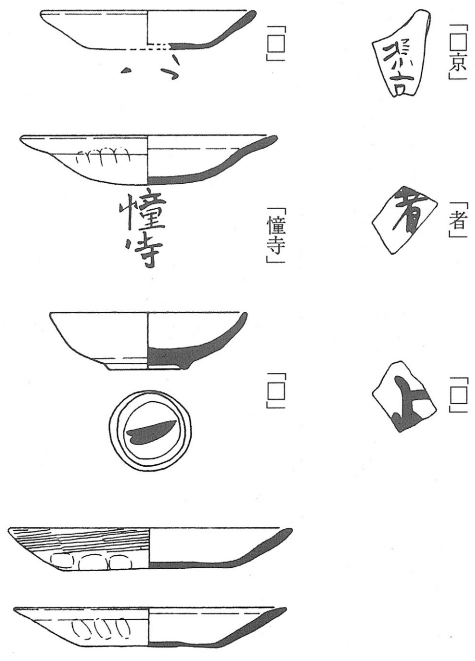
今回の調査地はJR長岡京駅の南東約四〇〇mに位置し、長岡京跡右京第一六三次調査として実施したものである。木簡は、勝龍寺城東辺外堀SD一六三〇五のC期堆積層から、「懂侍」「者」などの墨書土師器皿とともに出土した。東辺外堀SD一六三〇五の規模は、最大幅約五m深さ二mで、断面逆台形を呈する。土師器の特徴から、一六世紀後半期と考えられ、細川藤孝が大改修した時期前後の遺物と思われる。

8 木簡の积文・内容

(1) 奉 転 読 カ ノ キ

(272)×(42)×3 081

大般若経転読札の断片である。上端を山形に尖らせた形態で、ヒノキの板目材を用いている。墨書面は片面のみで、平坦に加工しており、裏面は板割り時の木目に沿った凹凸が残る。左側面は欠損しており、欠損部の一部に焼け焦げと思われる黒色炭化が見られる。木簡の出土位置は勝龍寺城の北東隅にあたる。また、出土地点から約二・五m北に西接する土塁には、六世紀末の古墳が封じ込められ



東辺外堀出土土器

ており、今回の木簡の出土位置は、その用途を考える上で興味深い。
 9 関係文献

長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告』一五（一九八五年）
 同『長岡京市文化財調査報告』一七（一九八六年）

（岩崎 誠）